

新しい都市の姿

本記事は、平成24年11月に実施したインタビュー内容を取りまとめたものです。

都市の魅力と日本の文化産業のあり方

文化人類学者
国立新美術館館長
元文化庁長官

青木保 氏



- ▶ [「歩ける都市」の魅力](#)
- ▶ [地方文化と暮らし](#)
- ▶ [文化は有望産業](#)
- ▶ [震災復興と文化・芸術](#)
- ▶ [青木保氏 プロフィール](#)

「歩ける都市」の魅力

—先生は「歩ける都市かどうか」というのが都市の文化度のバロメータとおっしゃっていますが、その意味するところを教えてください—

都市を歩くというのは住民にとって大きな楽しみの筈ですが、現実にはなかなかそうならない。例えば、東京駅から新宿までは、歩けない距離でもないと思います。しかし、実際に歩こうとすると、歩きやすく整備されていないので、四ツ谷を通過して新宿の方まで歩く気にはまずなれない。以前、パリで客員教授をしていた時には、この位の距離ならば朝晩歩いていた。パリの場合、まず通りが歩きやすくつくってある。歩道も整備されて、ちょっと歩き疲れてくるとカフェもある。街中がいろいろと歩ける形になっている。これが都市の文化度の高さを表す尺度かもしれません。

これまでの経験では、西ヨーロッパの都市は、だいたい歩けるようになってある。基本的に西ヨーロッパの主要都市では、歩くことが都市にいる人間の基本的動作であるとして、広場など人が憩う場所と人が移動する道はよく考えて設計されてある。そういう点では、東京は大きすぎるということもあるが、歩くという観点では都市の基本プランが考えられてこなかった。スポットは整備するが、つなぐことをあまり考えない。とくに人が歩けるということ、一般の人間が歩く、散歩するための場所であり通りであるという視点から都市づくりがされていないという気がする。

ニューヨークに行くと、ニューヨークの五番街の、ワシントン・スクエアからセントラルパークの間、かなりの距離だが、おもしろいから必ず歩く。上の方は、高級なものばかりで有名なホテルや百貨店、ずっと歩いて来て30番街、20番街になると、見かける人の服装も違うし、商店も違う。さらに来ると、ニューヨーク大学があり、文化的な場所になる。歩くだけで住んでいる人の構成などニューヨークの社会構成と文化の位置がわかりすごく面白い。

知らない都市を最初に訪れるときに感じる魅力の発信の場としても、歩ける都市、歩いて楽しい都市にすることがいま求められていると思う。外国人などの観光客は特に歩くのが好き。ぶらぶら歩いて写真を撮ったり、街の人々の動きや風景をおもしろがり、興味をもって歩くと思う。商店、景観などいろいろなものが組み合わさって、ビルものっぺらぼうのビルではなく、歩いて行くと景観が変わってくるような構造で、歩いて楽しいだけではなく、心が躍ってくるような都市が理想。あとはカフェが要所にあり、歩き疲れるとカフェに立ち寄る。そういう休みやすい、立ち寄りやすいところも意識的につくらなければ21世紀の世界都市とはいえないと思う。

—日本の地方都市で、ここはよいというところがありますか—

これは文化庁でも「文化芸術創造都市」として顕彰されたところですが、典型的な例として金沢があります。金沢には金沢城や武家屋敷や庭園といった伝統的な文化があり、よく知られていますが、他方、「金沢21世紀美術館」があり、毎年9月の連休に「金沢Jazz Street」というイベントをやっている。今年で4年目だが、3日間で約10万人が集まるので商店街は非常に喜んでいて。市内40カ所くらいで、アマチュアから国際的なスターまで演奏をする。街角でもちょっとした舞台をつくり、全国から大学のバンドが来たり、大小含めて3日間で300位のコンサートが開催されている。Jazz Streetは他の都市でも行われているイベントですが、横浜などでやると場所が拡散してしまう。金沢は、香林坊の辺りを中心にまとまりやすく、まさに歩いて次の演奏会場に行ける。サイズとしては非常によい。先に触れたように古い街並みもよいし、神社仏閣もあり、武家屋敷からお城もある。「金沢21世紀美術館」のような新しいものもある。

京都にも住んでいたこともありますが、京都も歩くことが難しい。文化財はたくさんあるが、それをつなぐことがうまくできていない。あれだけいいものをもっており、景観もすばらしいので、歩ける視点でもっと新しい形の都市設計をやっていただけたら世界最高の観光文化都市になると思います。大阪は都心に大学がいなくなりました。阪大までもいなくなった。大阪市立大学も外。大阪の地盤沈下は、単に大企業の本社が東京に移ってしまったからだけではなく、都心に大学がなくなったこともある。昼間、サラリーマンは働いていて、街にいるのは学生だから、それがなくなると街の活気がなくなる。しかも、学生は全国から来る。遊歩者というが、なんとなく街をぶらぶらしている人間がいるのが都市。働いている人、目的があって動いている人だけだとつまらない。お上りさんできょろきょろしている人がいてもよい。

地方文化と暮らし

—地方の伝統文化、農村文化などが人口減、高齢化とともに失われる恐れがあるといわれていますが、どのようにお考えでしょうか—

全体として、日本の魅力が乏しくなってきたのは、地方や地域の社会と文化がしぼんでしまったから。もっとも、これまでどここの街に行っても銀座通りがあったり、駅前の広場がみんな同じ形だったり。明治の頃は、日本を一つにするということでは良かったのですが、地方色がほとんどなくなってしまった。それから、地方で楽しく、充実して暮らすという考え方が、日本にはあまりない。

イギリスでは、シティで活躍していても引退したら地方に住みたいというのが一つの理想としてある。今でも貴族は地方に住んでいて、そういう人たちが地方の文化を育てている。地方の小さなまちでは、非常にきれいに自分た

ちのまわりの環境をつくり生活している。そういったところであれば、住みたいと思う。残念ながら、日本では地方に行ってもそういうことはあまり感じない。

地方で、そういう魅力的な生活をどうつくるのか、自然条件もある、家のつくりかたもある、空き地の利用もある。地方で楽しく暮らせる仕組みを考え出し、その実行キャンペーンをすることが必要と思う。日本は恵まれた自然があるので、他の都市と同じようなことをせずに、もっと魅力的な、個性的な都市をつくっていくことが本来可能だと思う。

単に特産品をつくるということではなく、日常生活を豊かにしていく。文化財などもあるに越したことはないが、普通の村の生活を楽しくしていくことも文化。今は、パソコンなどがあるので、田舎にいても情報に飢えることはない。むしろ、田舎で充実した人間らしい文化的な生活をつくりあげる。そういうことが人生の理想になる。東京で仕事をし、最後には田舎で自分の好きな生活をつくりあげるのが理想の人生設計、というのはあってもいいと思う。そういう場所として地方を考える。それは、単に引退した人たちが住むためというだけではなく、国も地域社会もそこで豊かに暮らせるような国土設計と、一般の人間の人生設計をあわせるとよい。それは地方にも豊かさをもたらすはずだし、そうならないといけない。そういうところにお金をもっとかけるべきだと思う。

個人が、地方でどう楽しく暮らせるか。生活の充実度、散歩ができるとか、晴耕雨読ができるとか、田園的な生活の理想像をどこかで組み立てる必要がある。そして、全国的にそれを実行する。よいところもいっぱいあるし、空いているところもいっぱいある。もったいないと思う。

文化は有望産業

—メディア芸術文化というのは成長産業だにご主張されていますが、日本での状況を含め、少し具体的に説明してください—

日本では、産業というと重厚長大の製造業中心だった。サービス産業という言葉がようやく出てきたくらいで、文化を産業化するということには、何か自制があって、産業にはいけないとか、産業にしても大したことはないということが根本にある。ゲーム機メーカーの売り上げが一時製鉄会社の売り上げを上回った頃、こういうゲーム産業は大切だと一時言われたが、またあまり言われなくなった。文化を産業としてとらえ、それを堂々と国の基幹産業の一つとして育てることが必要です。

中国、韓国は、まだ全体としてレベルは高くなくとも、国も社会も文化を産業として捉えていて、国策でアニメ人材・漫画人材を養成している。その面で日本がそういう意識が一番遅れている。

日本で産業化すべき一番大きな文化は、やはりアニメとか漫画。クールジャパン的なものは完全に日本の十八番で、それが目玉となって外国人が日本に来る。都市の活性化には一番だと思う。20世紀はアメリカ・ハリウッドが大文化産業で、あれで世界中から人を引き寄せた。出来たものは世界中に配信した。そういう文化発信基地がなかったら、アメリカ映画も世界中を席卷できなかったことは明らかだ。

そういうこともあって、文化庁長官をしていた最後の頃に「メディア芸術センター」を計画した。このアートとアニメとマンガとエンターテインメントの総合化された一大文化センター、その世界で最大・最高のものをつくることはまさに国策として必要なものだ。今、日本が世界から人を集められるとすると、このセンターは中心的な呼びものとなったと思う。テレビゲームやテレビドラマまでも含んだ大文化産業基地をつくれれば、世界の人が一度は行ってみたいと思うような文化創造施設となる。誰でも一度はパリのルーブルに行きたいとか、ニューヨークのメトロポリタンに行きたいと思う。あるいは、北京の故宮博物館に行きたいとか、それらの国や都市には文化的な目玉がある。ところが、日本にはそれらに比肩されるものがない。

文化産業とか、文化都市というものを考えるなら、そういう「メディア芸術センター」のようなものをつくってもらって日本全体の活性化につながる。一躍文化の世界的なパワースポットになる。みんなが元気になるし、漫画・アニメの世界だから、みんなが楽しめる。そこを日本における文化の海外発信基地として位置づける。そうすれば、世界中から多くの人が来ると思う。中国・韓国からもツアーで来る。ヨーロッパからも来る。ここ国立新美術館でも、個人的にはできることなら日本のアニメ・漫画、メディア芸術の総決算の展覧会をやれたらと実は思っている。

震災復興と文化・芸術

—今東北で震災復興が進められていますが、その中で文化の力というものをどのように感じておられますか—

毎年12月に文化庁が「東アジア共生会議」を行っており、今年は仙台で開催します。テーマの一つは「文化芸術による復興」、もう一つは「アーカイブ」で震災の経験の記憶などのデータ化の問題。ゲストの一人として、ルーブル美術館の副館長に来ていただく。

ルーブル美術館は、今年の4月から23点の美術品を持ってきて「出会い」というタイトルのもと、岩手、宮城、福島で巡回展を開催している。美術による復興ということルーブル美術館がフランスから来て行っている。そのオープニングには、フランス大使、ルーブル美術館の館長なども来ていて、復興のために芸術がいかに大切か、被災地の方々の気持ちの安らぎはいかに大事かを述べられた。ルーブル美術館はフランスから来て、被災地で特別展覧会を開催した。さすが文化大国フランスだと感銘を受けた。その文化芸術を復興の人的な支えにという意識はずばらしい。

また、震災後1年半が経ち、仮設住宅に住んでいる人たちの間には互いに知らない人が多いし、そこに住んでいる人たちの中には家族を失った人も多い。どこかみんなが話し合える場所、憩いの場所をつくった方が良いと言っていたら、青山学院大学の学生達が昨年8月にベンチを100あまり寄贈して、被災地で人々と一緒に組み立てていた。おばあさんが夕方ベンチに座って、その隣に座った誰かと話をはじめると、という場を設けることは大変大事で、それを学生達が行っていた。悲惨な自然災害には、やはり人々の交わりによる心の慰めが必要だと思う。

相馬野馬追は、どうにか馬を集めて今年は完全復活した。そういう行事は、一見、災害からの復興に向けて役に立つという物理的・物質的な面から見れば一見意味が無いように思える。しかし、地域に住む人々にとっては実のところそういう象徴的なイベントが無いと生きていけない面がある。文化芸術や伝統的な行事などは人間の生きるよりどころと実はなる。物質的な価値だけでは人間の気持ちや価値は計ることはできない。大地震と巨大ツナミの経験をもつインドネシアの人が、「文化は生命」と言っていた。

文化をどのように復興計画の中に入れ役立てていくかは大きな課題。それによって、そこで生きる人々に新しい希望ができてくる。文化産業などの拠点も東北へ持って行くといふかと思う。また、東北にも有名な港があり、それをクルーズで東京の台場などと結んだりすることもできればずばらしい。こちらから行くのもいいし、あちらから来るのもいい。何かつなぐものが必要だ。

「スマートシティ」的構想には、利便性は追求されているが、文化的配慮はあまり見られない。人々が普通に憩う形で楽しめるような文化的工夫ももっと考える必要がある。今の東北にとっては、東京などに無いものが逆に魅力的に存在することが大切。元々、文化としては豊かなものが存在する地域であるし、その豊かさをもっと深く広く国内外に知らせる必要もあると思う。人間の心の豊かさの追求を基本にした「歩ける都市」そして「憩える都市」の創造です。

青木保(あおきたもつ)氏 プロフィール

1938年(昭和13年)東京生まれ。文化人類学者・国立新美術館館長、元文化庁長官。東京大学大学院修了(文化人類学専攻)、大阪大学で博士号取得(人間科学)。

大阪大学、東京大学、政策研究大学院大学などで教授をつとめ、文化庁長官(2007年4月～2009年7月)を経て、青山学院大学特任教授を務める。2012年1月より国立新美術館館長に就任。1965年以来、アジア各地と西欧でフィールドワークに従事。欧・米での客員教授もつとめた。日本民族学会(現文化人類学会)会長もつとめている。2000年紫綬褒章。

著書:『儀礼の象徴性』(サントリー学芸賞)(岩波書店)、『『日本文化論』の変容』(吉野作造賞)(中央公論新社)、『異文化理解』(岩波書店)、『多文化世界』(岩波書店)など多数。

大使館訪問記

本記事は、大使館からの英文書面(平成25年1月)を和訳したものです。

カザフスタン共和国における首都移転について

カザフスタン共和国大使館
駐日カザフスタン共和国大使

アクルベク・アブサトウリ・カマルディノフ 氏



- ▶ [カザフスタンの政体概要について](#)
- ▶ [首都機能移転の背景と目的](#)
- ▶ [移転先の選定について](#)
- ▶ [移転の経緯について](#)
- ▶ [移転の内容について](#)
- ▶ [新たな都市の建設について](#)
- ▶ [移転後の評価と現状について](#)
- ▶ [カザフスタンの首都と国土の理念](#)
- ▶ [カザフスタン共和国大使館ホームページ](#)
<http://www.embkazip.org/> (新しいウィンドウで表示)

カザフスタンの政体概要について

問:カザフスタンの政体・立法・行政・司法制度について簡単に教えてください。

答:カザフスタンが独立したのは1991年12月16日です。

カザフスタン共和国は大統領制の単一国家です。憲法には、民主的、非宗教的、法治、社会国家であり、国家として最大の価値を個々人の生活、権利、自由に置くことと定められています。

カザフスタン共和国の大統領は国家元首、最高位の職であり、国内外の政治の主要な方向性を決定し、国内外との関係においてカザフスタンを代表します。大統領は、国民の統一と国家権力、憲法と国民一人一人の権利と自由の不可侵の象徴であり、これを保障します。

政府はカザフスタン共和国の行政権を行使し、行政府を統率するとともに、その活動を監督します。

立法機能は常設の二院、セナート(上院)及びマジリス(下院)から成るカザフスタン共和国議会が担います。

セナートは憲法に則って選出された議員で構成され、具体的には各州、主要都市及び首都からそれぞれ2名ずつ選出されます。

国の文化やその他の社会的に重要分野からの代表を保持しておく必要から、セナート議員のうち15名は大統領が任命します。

マジリスは憲法に則って選出された107名の議員から成ります。マジリスの代表9名はカザフスタン人民議会が選出します。上院議員の任期は6年、下院議員の任期は5年です。現在、マジリスには、「人民民主党(NurOtan)」、「カザフスタン民主党(Akzhol)」、「カザフスタン人民共産党」の3党が代表を選出しています。

地方行政区分は、14の州と特別に位置づけられた都市であるアルマティ市と首都アスタナ市に分けられています。

首都機能移転の背景と目的

問:アルマティからアスタナに首都が移転した背景と目的を教えてください。

答:新しい近代的首都を建設することは国家元首であるヌルスルタン・ナザルバエフ大統領の考えです。

首都移転は難しい決断でした。大統領は新首都が国内各地域から等距離におかれるべきであるということへの理解を得るため、大勢の議員を説得しなければなりませんでした。

アルマティは、大統領が指摘したとおり、経済的にも地政学的にも独立国家の首都としての要件を満たしていませんでした。約150万人にも上ろうという人口を抱えながら、国土のバランスからも、空間的な機能配置上も、将来に向けて有望な場所とはいえなかったのです。首都として維持していくためには、アルマティの市域を拡大する必要がありましたが、建物が非常に密集し、開発可能な地区に限られており、この都市をこれ以上広げる可能性は見出せなかったのです。

さらに、アルマティ周辺は地震活動が活発で、アルマティでの新規建設は、国内の他の都市と比べて、はるかに費用が嵩みます。しかも、新しい国家として、従来はさほど必要とされていなかった新しいオフィスビル、例えば議会コンプレックス、外務省、防衛省、銀行、外国の大使館などを建てる必要もあったのです。

移転先の選定について

問:なぜアスタナが首都の移転先に選ばれたのでしょうか。アルマティや他の都市と比較し、アスタナの強みは何でしょうか。

答:新たな発展の段階を迎えて、新首都は単に国をまとめる主要都市としての役割以外のものを求められました。

将来の活発な経済活動の場となりユーラシア経済を先導する都市へと急速に発展することを求められたのです。カザフスタン大統領の指示により、新首都の最適地を選定するため、国土全体についての詳細な調査が行われました。首都が満たさなければならない主要な基準は32ありました。とりわけ最重要とされたのは、社会経済指標、気象条件、地勢、地震活動、環境条件、工学・交通インフラの開発可能性、通信、ビル・コンプレックス、労働力などです。

この分析は、最も望ましい都市としてアクモラ(Akmola、アスタナの旧称)を示しました。アクモラとその周辺の移転前の状況からは、どのような建築手法でも用いることが可能でした。アクモラは地理的にカザフスタンの中心に位置し、重要な経済地域や主要高速道路の結節点にも近い都市です。

当時アクモラの人口は20万人前後でしたが、主な開発計画により40万人に膨らむことも見込まれていました。ところが、現時点での人口増加は、周知のとおり、我々皆の予測を上回っています。

アスタナはユーラシア大陸の中心という恵まれた立地により、ヨーロッパとアジアを結ぶユニークなトランジット・ブリッジになるとともに、経済的に有利な交通・通信・流通センターとなりうるのです。

移転の経緯について

問: 移転はどのような経緯で行われたのでしょうか。移転の手続き、プロセスはどのように進められたのでしょうか。

答: アルマティからアクモラへの首都移転の決定は、1994年7月6日、カザフスタン共和国最高評議会によって採択されました。

1995年9月15日、カザフスタン大統領令「カザフスタン共和国の首都について」が公布されました。法と同じ効力を有するこの大統領令によって、最高機関及び中央当局の移転に関する業務を進めるため、特別国家委員会設立の指令が出されました。政府はアクモラに必要な全ての施設を準備するため、特別基金を集める目的で、予算外の「新首都基金」を設立しました。同時に政府は、新首都の建設、インフラ整備に加わった投資家への特例とともに、税金及び特恵関税に関する提案を大統領に提出する必要もありました。

公式の首都移転は1997年12月10日に行われました。1998年5月6日の大統領令によりアクモラはアスタナに改称され、新首都は1998年6月10日、国際社会に披露されました。

首都移転のプロセスは短期間に終わるものではありませんが、基本的には予定どおりの2000年までに完了しました。

現在、アスタナの面積は700km²以上となり、人口は2012年6月1日時点で750,000人超となっています。アスタナは、アルマティ、サリアルカ(Saryarka)、エシル(Yessil)の、三つの区から成ります。

移転の内容について

問: どのような機関が新首都への移転対象となったのでしょうか。

答: 今日アスタナは国内でも有数の大規模な政治行政、ビジネス、及び文化の中心となっています。国の全ての中央機関、海外の外交使節団、国内外企業の本社、代表的な大学、最新の医療クリニック、及び文化機関がアスタナにあります。

我が国の首都は、世界中の20か国以上と友好的な姉妹都市関係を通じて結ばれています。1999年7月には、UNESCOの決定によりアスタナは「ワールド・シティ・タイトル」を受賞しました。2000年以来カザフスタンの主要都市として首都・都市国際議会(International Assembly of Capitals and Cities)のメンバーとなっています。

アスタナの使命は、ユーラシア地域の文化的・知的センターとなること、そしてカザフスタンの持続可能な開発の主たる原動力となることです。

新たな都市の建設について

問: 新首都のコンセプトと、デザイン、計画、インフラ整備の面での特徴等について教えてください。

答: ヌルスルタン・ナザルバエフ大統領の描く首都に、特別なユーラシアスタイルを作り出すという考えが、アスタナの建築コンセプトの基礎となっています。アスタナの総合開発計画は著名な日本人建築家、黒川紀章氏によるものです。

今日、アスタナは建築規模で見ると国内最大級です。首都となってからのアスタナには住宅が1,000万㎡前後建設されました。地元の建設会社及びフランス、イタリア、スイス、トルコといった海外の会社が何百社もアスタナ開発に携わりました。

21世紀の都市開発の、ハイテクノロジーや革新的手法が都市建設に幅広く利用されました。カザフスタンの近代的首都の建築様式は、東西の伝統文化を上手に調和させ包含したものです。世界中の著名な建築家が最高のプロジェクトを実施しました。

バイテックタワーは新首都のメインシンボルになり、ランドマークとして知られるようになりました。その他にも特徴的な建造物があり、有名な英国人建築家ノーマン・フォスターが設計したピラミッド型の「平和と調和の宮殿」、世界一高いテント型建築であるカーン・シャティールショッピングセンター、海から最も遠いドゥマン水族館、カザフスタン中央コンサートホール、「アスタナの勝利）」や「極地の光」といった居住コミュニティ、国内企業であるカズムナイガス社（KazMunayGas）やカザフスタン鉄道（Kazakhstan Railways）の事務所ビルなどが代表的です。

首都の近代的スポーツ施設の中には30,000人収容可能な「アスタナ・アリーナ」スタジアム、2011年には世界一とされた10,000人収容可能な独特な自転車トラック「サリアルカ（Sary-Arka）」もあります。また、スケートリンク「アラウ（Alau）」も最高の国際水準を満たす重要な複合スポーツ施設です。

今日、アスタナは庭園都市にもなっています。グリーンベルトはより幅を増して、アスタナは広大なステップの中の緑のオアシスようになってきており、無公害のメガシティのモデルとなっています。

移転後の評価と現状について

問：アスタナ移転後、既に10年以上経過しています。2012年にはアスタナの整備を概ね完了する予定と伺っていましたが、新首都アスタナの移転後の評価と現状、それからアルマティの現状について教えてください。アルマティは金融センターとして成長しているのでしょうか。

答：今日、アスタナはユーラシアの中心であり、様々なフォーラム、会議、国際的に重要な活動が行われています。ここ数年間、カザフスタンの首都は幾度も国際社会の注目を集めてきました。世界・民族宗教会議、アスタナ経済フォーラムその他の国際的に重要な催しが定期的開催されています。更にアスタナは、上海協力機構（SCO）やイスラム協力機構（OIC）の首脳会議のほか、欧州安全保障協力機構（OSCE）の歴史的な首脳会議の開催地ともなりました。

2011年には第七回アジア冬季競技大会（冬季アジア大会）の出場者とゲストを迎えました。

首都移転はアスタナの経済発展に強力な勢いをもたらしました。アスタナの高い経済成長率は数えきれないほど多くの投資家を呼び込んでいます。例えば、誘発投資額は30倍に、地域の域内総生産は90倍にも上りました。国内総生産（GDP）はアスタナが占める割合は約8.5%になります。

首都の経済の基礎となっているのは、貿易、工業生産、交通、通信及び建設です。工業生産は主に建築資材、食品、機械工学に集中しています。首都移転以来、首都の工業生産額は11倍に増大しています。

アスタナはカザフスタン最大のビジネスセンターの一つとなりました。アスタナの企業家文化はダイナミックに発展しており、50,000以上の中小企業で約200,000人が働いています。

2012年11月、アスタナにおける国際博覧会・EXPO-2017の開催が決定されました。これは、アスタナのさらなる発展の基礎となることでしょう。EXPO-2017のために建設される全ての施設によって、アスタナは、主要な国際展示会のプラットフォームとなることでしょう。

一方、アルマティについて触れておくと、同市がカザフスタン最大都市であり続けることは明白です。現在、アルマティは中央アジアおよび独立国家共同体（CIS）の地域金融センターを目指しており、南部の都市としての大きな潜在力を活かすことで、この都市を国際水準に高めていくことができます。そして2つの強力な拠点のプレゼンスによって、国全体の経済的なポテンシャルが高まります。

一つの国に二つの大きな拠点がある例は沢山あります。アンカラとイスタンブール、モスクワとサンクトペテルブルク、カラチとイスラマバード、リオデジャネイロとブラジリア、メルボルンとキャンベラ、オタワとトロント、ワシントンD.C.とニューヨークなどです。こうした流れの中で考えれば、我が国は最初でも最後でもないでしょう。

カザフスタン初代大統領の意思によって誕生したこの新首都は、短期間で、国の理念となり、若い我が国の独立と世界的な成功のシンボルとなったのです。

カザフスタンの首都と国土の理念

問:カザフスタンの国土と新首都の将来ビジョン、理念についてお聞かせください。

答:ヌルスルタン・ナザルバエフ大統領は、アスタナの十周年に寄せた基調演説において、新首都開発の理念を、生き生きと象徴的に示しました。

「いにしへの土地ここサリアルカ(Sary-Arka)に、我が国の未来の、新たな揺籃の地が生れた。アスタナの歴史とカザフスタン国民の向かう先は、互いに分かつことはできない。

首都は我が国の力強さ、躍動的な発展、そして永続性を体現する。アスタナは輝かしく、力強く、豊かな都市となり、カザフスタン国民を一つにし、未来を渴望する。

我々の首都は、母なる大地の心臓であり、その力を信じる人々の志の象徴であり、大いなる使命でもある。今日、我が国土全体がそうであるようにアスタナには百余の民族が暮らしている。国民の友情、相互理解、そして連帯が、アスタナと新しいカザフスタンの発展の礎となる。」



((c)外務省)



((c)Esri, DeLorme, NAVTEQ, TomTom, Intermap, increment P Corp, GEBCO, USGS, FAO, NPS, NRCAN, GeoBase, Kadaster NL, Ordnance Survey, Esri Japan, METI, swisstopo, and the GIS User Community)